

## 解説

## 周辺環境と技術動向

## アジアにおけるリモートセンシング学会の連携について

竹内 渉\*

Cooperation of Remote Sensing Societies in Asia

Wataru TAKEUCHI\*

Keywords : Foreign students, EMSEA, ASEAN, SAARC

大学院の修士課程に進学以来、陸域のリモートセンシングに携わるようになり、アジアを中心とした留学生や海外との共同研究に多数参画する機会を得ました。2000年にシンガポールで行われた Asian Conference on Remote Sensing (ACRS) に参加したのが初めての国際学会で、1980年 半ば頃から20年強の間、私の所属した研究室が長らく運営の中心体を担ってきましたが、開催国のイニシアチブを色濃く打ち出すようになった直後のことであったと、記憶しております。それから20年が経ち、ACRSも40回の節目を迎え、他にもIGARSS, EMSEA/ISRS, ISPRS, COSPARなどの陸域のリモートセンシングに関連した国際学会で発表する機会を得ました。それぞれ母体はある国や地域に依拠していますが、グローバル化による規模の拡大と差別化にジレンマがあるようです。

もう少し広く社会的な周辺状況を考えると、この20年でアジア各国の経済的な発展、それに伴う科学技術関連予算の増大、留学生の積極的な受け入れ、などがあり、リモートセンシング分野でも、国際的に見て、我が国の相対的な位置付けにも大きな変化があったものと思います。電子ジャーナル化、オープンアクセスジャーナルへの取組み、衛星データのオープン化とビッグデータ化、ソフトウェアのオープン化とクラウド処理環境の充実、などデジタルトランスフォーメーション(DX)の恩恵を受けて利便性が向上した一方で、論文発表などによる国際情報発信力の重要性が増し、競争が激化したとも取れます。

アジアにおいてRSSJと関わりが最も深いものの一つは、2013年から、韓国KSRS・台湾CSPRS・日本RSSJの年2回の学術講演会のうち1回を「英語を公用語とする国際学会」へと発展してきた International Symposium on Remote Sensing (ISRS) だと思っています。ISRSは、1990年代初頭に、故高木幹雄先生(東大生研名誉教授)と故Soon-dal Choi先生(KAIST名誉教授)が主導して行った日韓のリモートセ

ンシングプロジェクト Environmental Monitoring from Space of East Asia (EMSEA) に端を発し、2006年からは台湾が参加を開始し、日本写真測量学会が2017年度より共催機関となり現在に至ります。

ISRSへの学生の派遣、論文審査、student nightの担当を長らく担当し、論文の質、英語での発表スキル、海外開催時の論文発表数、参加人数などの点で、韓・台の活動が目覚ましく発展していく姿を目の当たりにし、国際化という意味で日本との温度差が大きく浮き彫りになりつつあるなと思っております。

少子高齢化が進む中、科学技術の発展に国の政策の重点を置き、中国、東南アジア ASEAN、南アジア SAARC の留学生を積極的に受け入れている、という点で韓・台・日は共通しております。ISRSは、学術的な情報交換の場であるばかりではなく、student nightなどの「顔の見える交流」を生み出し、民間・学会をスポンサーとした学生優秀論文の表彰制度による「若手を育てる場」を提供するという観点から、「地域連携」としての有用性はますます高まるのではないのでしょうか。

ここで言う「若手人材育成」の定義には、母国の学生だけではなく、留学生も含まれるものと思います。留学生の主な出身地である ASEAN や SAARC 諸国を見ますと、豊富な若年層と経済発展に支えられて高等教育機関への進学率は年々上昇しておりますが、リモートセンシングに関する国内学会が存在する国は意外と少なく、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどごく一部に限られております。これまで乏しかった国内の連携強化は、留学帰国者を中心に10年ほど前から積極的に始まっており、インド ISRS、インドネシア ICOIRS、マレーシア IGRSM など、国内の学術講演会が英語で開催され始めました。

コロナ禍で学術会議のオンライン化が進んだことは、特に時差の少ないアジア各国のリモートセンシング学会の連

(2021. 2. 21 受付, 2021. 3. 15 改訂受理)

\* 東京大学生産技術研究所

〒153-8505 東京都目黒区駒場 4-6-1 Bw-602

\* Institute of Industrial Science, The University of Tokyo, Bw-602, 4-6-1, Komaba, Meguro, Tokyo 153-8505 Japan

携のあり方を変えるでしょう。人口が密集し自然災害や環境変動が多いアジア地域では、リモートセンシングの貢献度が高く、解決すべき社会的問題を多く有する国々からの留学生は、将来にわたってお付き合いできる研究パートナーとして捉えるべきでしょう。各国のコミュニティの良

さを活かしながら、国際的にどう連携するか、互いに Win-win となる「地域連携」を構築する方向性で積極的に動く、これがこれからの 20 年に向けて RSSJ がやるべきこと、だと思います。

#### 〔著者紹介〕

##### ●竹内 渉 (タケウチ ワタル)



1975 年生。1999 年東京大学工学部土木工学科卒業。2004 年東京大学工学系研究科社会基盤学専攻博士課程修了。博士（工学）。2004 年東京大学生産技術研究所入所、特任助教、講師、准教授を経て、2018 年より人間・社会系部門 教授。2007-2008 年タイ王国・アジア工科大学院客員研究員（JICA 短期専門家）、2010-2012 年日本学術振興会バンコク研究連絡センター長兼務（長期派遣）、2017-2019 年 内閣府 政策統括官付 上席政策調査員（総合科学技術会議・イノベーション会議事務局 エネルギー・環境担当）。専門は、環境・災害リモートセンシング。

E-mail : wataru@iis.u-tokyo.ac.jp